

# 「言葉の提示」と「口頭表現」で

## お話づくりの授業が変わる

金子 淳 嗣

### 一 主張

これまで行われてきた、お話づくりの授業の問題点は、大きく二つある。

一つは、子どもの想像が思うように膨らまず、似たような設定のお話、平板なお話になってしまうことである。これは、単元全体を通して、想像を膨らませる手だてが十分ではなかったことによる。

もう一つは、膨らませた想像を書き表すことができないことである。これは、お話づくりに必要な表現の仕方が必ずしも明確でなく、それを意識した指導が十分でなかったことによる。そのため、一見したところ楽しそうにお話づくりの活動に取り組んではあるものの、子どもにどのような表現の仕方が身に付いたか、はっきりしない授業が多く見られた。

一つめの問題点を克服する手だてとして、「ファンタジーの二項式」<sup>(1)</sup>を取り入れる。「ファンタジーの二項式」とは、関連性のない二つの言葉で、お話を作る手法のことである。この手法の考案者であるジャンニ・ロダリーは言う。

物語は〈ファンタジーの二項式〉によってのみ誕生しよう。

《馬―犬》は、真に《ファンタジーの二項式》にはならない。

動物学上の同一種内の単純な連想である。(中略)

ふたつのことばの間には、ある距離が必要である。一方のことばが他とまるで関係のないこと、およびその接近がかなり異常であることが必要である。なぜなら、想像力というものはそれらの間に類縁関係を設置し、ふたつの要素が同居しうる(ファンタステイックな)集合をつくり出すために活動を開始することを余儀なくされるからである。(2)

「ふたつのことばの間には、ある距離が必要である」とするロダリーは、「ファンタジーの二項式」に当てはまる言葉として、「犬」と「たんす」<sup>(3)</sup>を例に挙げている。この言葉の例を受け、本研究においても、関連性のない二つの言葉を基に、お話づくりを進めていく。

また、想像を膨らませるもう一つの手だてとして、口頭でお話を作る活動を取り入れる。小集団になり、友達の話に続けて即興的にお話を考え、口頭で表現する活動である。

口頭での表現にかかわり、話し言葉と書き言葉との関係について、倉澤栄吉は言う。

話しことは、かきことばに先行するのであるから、文章表現には、まず音声表現がなくてはならない。つまり、かくことばの準備 (writing readiness) の一つとして、はなすことがたいせつなのである。(4)

倉澤は、このような「レディネスとしての口頭作文」の「主目標」を10個挙げ、ねらいを達成するために予想される学習の一つとして「つぎ足しはなし」を提示している。そして、一、二学年で行う「つぎ足しはなし」のねらいは、10個挙げた「主目標」のうちの、「③ なるべく速くまとめて、すぐ発表できるように態勢をつくる習慣と技術。」「④ すばやい思考力をねる、想像力を養う。」「⑩ 独創的な個性に富む表現をする。」であるとしている。(5)

このうち、本研究では、「⑧ すばやい思考力をねる、想像力を養う。」の「想像力」に着目する。「つぎ足しはなし」、つまり友達の話す場面に続けて、どのような展開にするかを即興的に考える過程で想像が膨らむととらえるのである。

二つめの問題点を克服するために、まず、文のまとまりと順序とを意識した、お話づくりに必要な起承転結を表す表現の仕方を明確にする。そして、明確にした表現の仕方を、想像を膨らませる過程において、練習・本番の二段階のお話づくりで身に付けさせる。

本研究では、起承転結を次のようにとらえている。

【起】

お話の始まり。住んでいるところ、名前の由来、特徴、得意なことなど、登場人物とそれを取り巻く状況を紹介する。

【承】

「ある日のことです」、「今日は」などで始まり、「起」に続けて、主人公が行動を起こす。このあとに、何か事件が起こりそうな予感をさせる終わり方をする。

【転】

「そのときです」、「突然」などの言葉や会話、音で始まる。新たな人やものが登場したり、場面が変わったりして、何か事件が起こる。

【結】

「転」の内容を受けて、事件が解決したり、お話がまとまったりする。

起承転結を表す表現の仕方以外にも、お話づくりに生かすことのできる表現の仕方があふ。例えば、経験したことを書く過程で学ぶ「色」、「音」、「手触り」、「会話」、「比喩」などの表現の仕方である。(6)

そこで、これらの表現の仕方を10項目からなる「書くときのポイント」にまとめる。そして、一覽を提示し、練習・本番のお話づくりで、子どもが必要な表現の仕方を選択して使うことができるようにする。

このような手だてにより、お話づくりの授業が変わり、子ども書く力が高まるのである。

## 二 指導の実際

### (1) 単元の流れ

本単元は、練習・本番の二段階で構成し、想像を膨らませる手だてと、表現の仕方を身に付けさせる手だてとを講じる。

#### 【練習のお話づくり(ステップ1)】

- ① 練習のお話づくりで使う二つの言葉を提示し、二つの言葉を入れた一文を作らせる。
  - ② 教師作のお話を読ませ、表現の工夫を問う。
  - ③ 二つの言葉を入れたお話を作らせる。
- #### 【本番のお話づくり(ステップ2)】
- ① 本番のお話づくりで使う言葉の一つを提示する。
  - ② 子どもが決めた言葉と、教師が提示した言葉とを使って、三人組で口頭表現させる。
  - ③ 子どもが決めた言葉と、教師が提示した言葉とを入れたお話を作らせる。

### (2) 授業の実際

【単元名】お話の贈り物(特設単元・全五時間)

【対象学級】小学校一・二年複式学級(7)

#### ① お話を作る目的と相手とを知る【二時間目】

まず、「お話のおくりもの」と板書し、「贈り物」とは何かを問うた。子どもは、「プレゼント」「もらった人がうれしくなるもの」「心がこもっているもの」と答えた。

次に、「お話を作り、自分が贈りたい相手に贈って楽しんでもらおう」と呼び掛けた。子どもは、贈りたい相手として、「転校した友達」、「遠くに住んでいる親せき」、「幼稚園や保育園の先生」などを挙げた。

その後、学習への見通しをもたせるために、大まかな内容を説明した。

ア 二つの言葉を入れてお話を作ること。

イ 練習・本番のお話づくりを行うこと。

ウ 練習では、教師が提示する二つの言葉を入れてお話を作ること。

エ 本番では、一人一人が決めた言葉と教師が提示した言葉とを入れてお話を作ること。

オ 本番のお話を贈りたい相手に贈ること。

大まかな内容を説明した後、本番のお話に一番登場させたい人や動物は何かを問うた。子どもは、「ふくろう」、「やぎ」、「ペンギン」、「犬」、「イルカ」などの動物を挙げた。

その後、一番登場させたい動物のペープサートづくりを経て、お話づくりの活動に入った。

#### 働き掛け1

「きつね」、「雪」という二つの言葉を提示し、一文を作らせる。

まずは、練習のお話づくりである。

「きつね」、「雪」の二つの言葉を提示した。そして、二つの言葉からそれぞれ思い浮かぶことを発表させた後、一文を作るよう指示した。

子どもは、「きつね」、「雪」という言葉や連想したことを入れて、次のような一文を作った。

- ・きつねが、初めて雪を見る。
- ・きつねが、友達と雪合戦をする。
- ・きつねが、山でかまくらを作って遊ぶ。
- ・きつねが、かわいい雪だるまに化けて、友達をおどろかす。
- ・きつねの形をした雪だるまを作る。
- ・きつねの絵がかいてあるセーターを着て、スキーをする。

この活動を通して、全員が五つ以上の一文を書いた。「きつね」、「雪」という二つの言葉を提示し、一文を作らせることで、子どもは場面の設定をいくつも考えることができた。

## ② 教師作のお話を読み、使われている表現の仕方に着目する【二時間目】

働き掛け2

「きつね」と「雪」という二つの言葉を入れた教師作のお話「コンと大きな雪玉」を読ませ、表現の工夫を問う。

練習のお話づくりの続きである。まず、子どもを教師の近くに座らせ、絵を見せながら、教師作のお話「コンと大きな雪玉」を読み聞かせた。

### コンと大きな雪玉【教師作のお話】

ある村のずつとおくに、雪がかいコンコン山がありました。ここにすむコンは、元気のよいこぎつねで、冬になると、毎日、雪あそびをして楽しんでいました。

そんなある日のこと。今日も朝から、コンと友だちの明るい声がひびいています。山の上から下まで、しつぽのそりできょうそうをしているのです。

一回目のきょうそうで、コンは、おしいところでまけてしまいました。二回目も、がんばってすべりましたが、一番になれませんでした。三回目に、コンは、こんどこそかつぞと思いましたが、そして、ふわふわのしつぽをもって、思い切り雪をけりました。

ドスン。きゅうに大きな音がして、雪がけむりのようにまい上がりました。なんとコンの体が前へなげ出されたのです。そして、そのはずみで、くるくるくるくる。山をころがりはじめてしまいました。

コンは、回りながら、まっ白い雪玉になっていきます。下へ行くにつれ、コンの雪玉はどんどん丸く大きくなり、スピードもぐんぐん上がります。前をすべっていた友だちをみんなおいこし、とうとう一番になりました。

少しおかれてゴールについた友だちが、

「コン、はやいね。しつぽですべるよりも、ずつとはやいよ。」

とおどろいたようすで言いました。それを聞いたコンは、

「へへへ。すいでしょ。」  
ととくいそうに答えました。でも、心の中では、目が回ってこわかったなあと思いました。

子どもは熱心に聞き入り、コンが雪玉になって転がる場面では大きな笑い声が上がった。読み聞かせの後、感想を発表させた。子どもは、「コンが雪玉になったところがおもしろかった」「なぜコンの体が投げ出されたのか不思議だった」など、多くの感想を発表した。

次に、教師作のお話を拡大したものを掲示し、二回読ませた。そして、お話をおもしろくするために、書き手が工夫しているところを問うた。子どもは、次のように、それぞれの場面に見られる工夫を挙げた。

- 【一の場面】
  - ・「コンコン山」と山に名前が付いていたり、「コン」という名前が付いていたりして、紹介している。
- 【二の場面】
  - ・「そんなある日のこと」で始めて、どんなことがあるのかなと思わせている。
  - ・「二回目」「二回目」「三回目」と繰り返して、「三回目」でコンが一番になっている。
  - ・最後に、「ふわふわのしっぽをもって、思い切り雪をけりました」とあり、何か事件が起こりそうな感じがする。
- 【三の場面】
  - ・「ドスン」という大きな音で始まり、コンの体が前へ投げ出されるという事件が起こっている。
- 【四の場面】
  - ・ゴールに着いた後のことを書いて、「コンと大きな雪玉」のお話をまとめている。





その後、「書くときのポイント」を提示して、教師作のお話に見られる工夫を問うた。

書くときのポイント ステップ二

お話を書くときにつかってみよう

 <p>①</p>	<p><b>め</b></p> <p>(いろいろおおききかたちもよううごき)</p> <p>☆みどりのはっぱにまっ白ゆちようがとまっています。</p> <p>☆天宮はたをふって、おうえんしました。</p> <p>☆三かくのぼうしに、風がたのかざりをつけました。</p> <p>☆しましまもよしのふくをきて、さん歩に出かけました。</p> <p>☆だいの上から、すばやくまわってとびおりました。</p>
 <p>②</p>	<p><b>みみ</b></p> <p>(おとこえ)</p> <p>☆遠くの野原に、たいこの音がひびいています。</p> <p>☆山のおくから、天の鳴き声が聞こえてきました。</p>
 <p>③</p>	<p><b>て</b></p> <p>(さわったかんじ)</p> <p>☆かたいねんどを何どもこねて、ちわらかくしました。</p> <p>☆にわの池に足を入れたら、びんやりしました。</p> <p>☆ばらとけをさわったら、ゆび先がいたくなりました。</p> <p>☆虫にさされて、がゆくなりましたので、くすりをぬりました。</p>
 <p>④</p>	<p><b>はな</b></p> <p>(においかおり)</p> <p>☆はのはなを歩く、陣のにおいがあります。</p> <p>☆お花やさんに入ったら、あまいかおりがありました。</p>
 <p>⑤</p>	<p><b>くち</b></p> <p>(あじ、食べたかんじ)</p> <p>☆おやつは、あまいイチゴあじのあめでした。</p> <p>☆からいカレーを食べたら、あせがいっぱい出しました。</p> <p>☆なかなかかみきれないので、そのままのみこみました。</p> <p>☆大すぎなスープなのに、あつくのめませんでした。</p>

お話を書くときに つかって みよう

 <p>⑧</p> <p><b>ワンワンとは</b></p> <p>☆大きなライオンが、こちらを見て「<b>ワン</b>」とほえました。          ☆夏のよ空に、<b>フーン</b>と花火がかりました。          ☆じてん車をこいだら、<b>ギギギ</b>と音がしました。</p>	 <p>⑦</p> <p><b>どつきりとは</b></p> <p>☆風車が、風によかれてぐるぐる回っています。          ☆赤ちゃんのほおが、<b>くく</b>とふくらみました。          ☆ニメートルもあるへびが<b>にょにょ</b>と、道をよこざりました。</p>	 <p>⑥</p> <p><b>たとえ</b></p> <p>☆羽しるようなかたむすのすべりだいであそびました。          ☆空に、<b>わたあめ</b>みたいにくもがうかんでいます。          ☆<b>雪</b>のように白いうき雪が、ひよんひよんはねています。</p>	 <p>⑤</p> <p><b>かいわ</b></p> <p>☆「みんな、いつしよにあそぼうよ。」          「そうだね。購れているから、外でブランコをしよう。」</p>	 <p>④</p> <p><b>かきだし</b></p> <p>☆ワンワンどつきりとは、かいわといかけ)          ☆ベツタンベツタン。きょうは、もちつき大会です。          ☆「ねえねえ、そこで何をしているの。」          うしろから、だれかに、話しかけられました。          ☆せうのはなは、どうしてあんなに長いのでしょうか。          それには、こんなわけがあるのです。</p>
---	--	--	--	---

子どもは、教師作のお話から、「色」、「比喩」、「会話」などにかかわる工夫を見付け、発表した。

③ 表現の仕方を使ってお話を書く【三時間目】

働き掛け 3

「きつね」、「雪」という二つの言葉を入れたお話を作らせる。

一年生の田中は、「コンきちのゆきだるま」という題で、次のお話を書いた。

コンきちのゆきだるま

一ねん 田中 けんた

あるむらに、きつねのコンきちがすんでいました。コンきちはふゆになると、たのしそうにゆきであそびました。

ある日のこと、コンきちがゆきであそんでいると、ともだちのコン太くんが、

「コンきちくん、いつしよにあそぼうよ。」

といいました。そして、ふたりで、大きなゆきだまをころがそうとしたときです。

「うわー。」

ゆきだまがころがっていきました。コンきちがおいつきそうになつたとき、

「ゴロゴロゴロゴー。」

とへんな音が出て、コンきちもゆきだるまになつてしまいました。

あとから、コン太くんがおいかけてきたら、コンきちはゆきだるまになっていました。コン太くんは、

「あはは、コンきちゆきだるまだ。」

といいました。コンきちも、

「ニヒ。」

とわらいました。

田中は、一の場面で、主人公のコンきちを登場させ、住んでいるところと冬の遊びについて簡単に紹介している。二の場面は、「ある日のこと」で始め、友達コン太くんの呼び掛けに応じ、主人公と一緒に雪玉を転がすという行動を起こさせている。また、二の場面の最後を「そして、ふたりで、大きなゆきだまをころがそうとしたときです。」と表し、これから何かが起こりそうな終わり方になっている。

これを受け、三の場面は、「うわー。」という声で始め、雪玉を追い掛けたコンきちが、変な音とともに雪だるまになるという展開にしている。そして、四の場面で、「あはは」と笑うコン太くんに対して、「二じ。」という照れ笑いを思わせる独特の表現を用いて、お話をまとめていく。文のまとまりと順序とを意識した、起承転結を表す表現の仕方を使って、練習のお話を書くことができたのである。

また、田中は、経験したことを書く過程で学んだ「書くときのポイント」から、お話に必要な表現の仕方を選択して使っている。例えば、次のような「大きさ」や「音」、「会話」などを表す表現の仕方である。

・ 大きさ (大きなゆきだま)

・ 音 (へんな音)

・ 擬声語、擬態語 (「ゴロゴロゴロゴロ」)

・ 会話 (「コンきちくん、いっしょにあそぼうよ。」「あはは、コンきちゆきだるまだ。」)

二年生の木村は、「雪だるまになつたコン太」という題で、次のお話を書いた。

雪だるまになつたコン太

二年 木村 ゆか

きつね山に、コン太というきつねがすんでいました。コン太は、冬になると、一日中雪で遊びます。

ある日、コン太は、雪だるまをつくりました。

「大きいもの、作るぞう。」

コン太は、どんどん作っていききました。

はじめに、顔のぶぶんを作っていました。三十分かかって、やつとおまんじゅうのような顔がかんせいしました。

つぎに、体を作りました。一時間くらいかかって、大きな雪玉ができました。体の上に頭をのせようと思いました。

そのときです。雪がおちてきました。コン太は、「冷たい。」

と言って転がりました。ごろごろごろ。コン太は、大きな雪のかたまりになりました。

コン太の雪玉は、木の前で止まりました。顔を出すと、木から雪がおちて、コン太が雪だるまになりました。

「目の前が、まっ白になつたぞう。助けてくれ。」

そしたら、みんながかけつけてくれました。

コン太を助けたあと、みんなが、新しい雪だるまを作りました。

コン太は、よかつたなあと思いました。

木村は、きつね山という場を設定し、田中と同じく、一の場面で、主人公のコン太を登場させている。二の場面は、「ある日、コン太は、雪だるまをつくりました。」で始め、雪だるま

を作る様子を「はじめに」、「つぎに」という順序を表す言葉と、作るのに掛かった時間を使って説明している。また、二の場面を「体の上に頭をのせよう」としました。」で終わらせ、次に何が起るのか、三の場面に期待をもたせている。

三の場面は、「そのときです。」という「転」を表す明示的な言葉で始めている。そして、雪が落ちてきたことをきっかけに、大きな雪のかたまりになり、木の前で、さらに雪が落ちてコン太が雪だるまになるという展開にしている。動きがあり、場面の様子が思い浮かぶような展開である。三の場面の最後に、目の前が真っ白になり、助けを求めるコン太を、四の場面で、みんなが助け、また新しい雪だるまを作ることで、お話をまとめている。教師作のお話を参考に、起承転結を表す表現の仕方を使って、練習のお話を書くことができたのである。

また、木村は、「書くときのポイント」から、次のような表現の仕方を選択して使っている。

- ・色（まっ白）
- ・大きさ（大きな雪玉、大きな雪のかたまり）
- ・擬声語、擬態語（どんどん、ごろごろごろごろ）
- ・比喩（おまんじゅうのような顔）
- ・会話（「大きいもの、作るぞう。」「目の前が、まっ白になったぞう。助けてくれー。」）

ここで紹介した田中、木村の二人を始め、すべての子どもが、「きつね」、「雪」という二つの言葉から想像を膨らませ、練習のお話を書くことができた。

#### ④ 小集団になり口頭でお話をつなぐ【四時間目】

働き掛け 4

一人一人が決めた言葉と、教師が提示した「不思議な種」という言葉とを入れて、小集団でお話を作らせる。

続いて、本番のお話づくりである。

まず、一時間目に子どもが作ったペープサートを与えた。次に、教師が「不思議な種」という言葉を提示し、「不思議な種」のペープサートを一人一人に与えた。そして、小集団でお話を作る手順を説明し、「一の場面（起）」を各自で練習させた。

#### 【小集団でお話を作る手順】

ア 一、二年生が混じった三人組になる。

イ 自分が決めた言葉のペープサートと教師が提示した言葉のペープサートを動かしながら、即興でお話をつなぐ。

ウ 自分が決めた言葉でお話を作るとき、「一の場面（起）」と「四の場面（結）」を担当する。

- ・一人目が「一の場面（起）」のお話を口頭で作る。
- ・二人目が、続けて、「二の場面（承）」を口頭で作る。
- ・三人目が、続けて、「三の場面（転）」を口頭で作る。
- ・一人目に戻って、「四の場面（結）」を口頭で作る。

田中と木村は、一年生の高木と同じグループになった。

三人は、一時間目に高木が決めた「ペンギン」という言葉と、教師が提示した「不思議な種」という言葉とを入れ、口頭で、次のようなお話を作った。



〈高木（一年生）…二の場面（起）〉

ペンギンのペンタが、氷の山に住んでいました。ペンタは、手をパタパタと大きく振り、ジャンプするのが得意です。いつか空を飛びたいなあと思っていました。

〈田中（一年生）…二の場面（承）〉

ある日のこと、ペンタは、海の近くを散歩しながら、空を見ていました。そして、手をパタパタと振り、「えいっ。」とジャンプしました。

〈木村（二年生）…三の場面（転）〉

そのときです。空から種がどんどん落ちてきて、ペンタの体に滝のように当たりました。すると、はねがぐんぐん生えてきました。とうとう、空を飛ぶ夢がかないました。

〈高木（一年生）…四の場面（結）〉

ペンタは、うれしくて何度も空を飛びました。そして、その不思議な種を友達のパンギンに分けてあげました。

木村が担当した「三の場面」は、「転」に当たる。木村は、「二の場面」を受け、「そのときです。空から種がどんどん落ちてきて」と、お話を新たな方向へ展開させようとしている。

⑤ 一人で本番のお話を作る【五時間目】

働き掛け5

一人一人が決めた言葉と、教師が提示した「不思議な種」という言葉を入れて、一人でお話を作らせる。

口頭でのお話づくりが終わった後、一人で本番のお話を書くよう指示した。一年生の田中は、「ひつじ」と「不思議な種」という言葉を入れて、次のお話を書いた。

メーちゃんとゆめのたね

一ねん 田中 けんた

あるふしぎな山に、ひつじのメーくんがすんでいました。メーくんは、空をとぶのがゆめでした。いつか、ふわふわとびたいなあと思っていました。

ある日のこと、メーくんがさんぽをしていると、ピカピカひかるきれいなものがおちていました。メーくんは、ひろって、おいをかぎました。

「うん、いいにおいがするぞ。いったい、なんのたねだろう。」  
メーくんは、おうちにもってかえろうとしました。

そのときです。そのふしぎなたねが、どんどんころがりました。そして、ころがったあとに、きれいなお花がいっぱいさきました。メーくんは、うれしくなって、お花の中に入りました。すぐに、たくさんのお花がメーくんの体にくっつきました。そして、お花がぐるぐる回って、メーくんの体が空にうかびました。

「わーい。」  
メーくんがよろこんでいると、かせがふいてきました。そして、体についているお花をふきとばしてしまいました。あっ、おちるよう。メーくんは、こわくなって目をとじました。

「もうあさだよ。おきなさい。」

とおかあさんがいました。メーくんの目がぱつとあきました。メーくんは、

「ゆめだったのか。」  
といました。あくびをしながら、本とうにそうならいいなあとおもいました。

二年生の木村は、「ふくろう」と「不思議な種」という言葉を入れて、次のお話を書いた。

ある山おくり、とんがり山がありました。そこにすむふくろうのホーは、絵をかくのが大すきでした。

ホーは、春にはきれいな花をかき、夏には海の生きものたちをかいて、秋には色あざやかなはっぱや木のみをかきました。ホーは、冬のすばらしいものをかくのがゆめでした。

冬のある日、ホーは、「絵のぐがほしいです」とサンタさんに手紙をかきました。その夜、サンタさんが来て、ホーのベッドにプレゼントをおいて行きました。

次の日に、ホーがプレゼントをあけると、絵のぐのほかにも、もう一つ、青と赤とみどりのピカッと光るものがありました。それはふしぎなたねでした。

ホーは、絵のぐとふしぎなたねをもちました。そして、冬ですばらしいものをさがしに、おうちから出ました。

はねを広げ、空に飛び上がろうとしたそのときです。ころころころ。ふしぎなたねが、ホーの手からおちて、さか道をころころとまわりました。

「まっつえ。」

とホーはおいかげました。でも、なかなかおいつきません。

やっつこと、たねは、とんがり山のおくで止まりました。そこは、お日さまの光がさしこんで、雪がふんわりつもつていました。

たねは、雪の中にズボツと入りました。そして、ぐんぐんのびてみどりの大きな木になりました。そう、これがサンタさんのおくりものでした。

ホーは、サンタさんのおくりものをじっと見つめ、

「やったよ。ゆめがかなったよ。」

と言いました。そして、すばらしいふうけいをむちゆうになつてかきました。

一年生の田中も、二年生の木村も、起承転結を表す表現の仕方を使っている。また、「書くときのポイント」から表現の仕方を選択して使っている。

この二人を始め、すべての子どもが、お話づくりに必要な表現の仕方を使い、自分が決めた言葉と教師が提示した「不思議な種」という言葉とを入れて、お話を書くことができた。

お話を書き上げた後、絵を添えて完成させた。その後、贈りたい相手に贈り、お話のよさを認められた二人は、学習のまとめとして、次の感想を書いた。

「ぼくは、お話づくりが大すきです。二つのことばをつかって、たのしいお話ができるからです。ようちえんの先生にも、「よくできたね」とほめられました。また、いろいろなお話をつくってみたいです。(田中)

「きつね」と「雪」からも、「ふくろう」と「ふしぎなたね」からも、とつてもおもしろいお話ができました。どんなお話にしようか考えるのが楽しいです。とくに三の場面がうまいくくと、うれしくなります。また、二つのことばをつかって、わたしにしかできないようなお話をつくってみたいです。そして、つくったお話を読んで、楽しんでほしいです。(木村)

二人とも、二つの言葉から想像したことを書き表すことに喜びを感じ、またお話を作ってみたという活動への意欲をもっている。

### 三 結論

「言葉の提示」と「口頭表現」で、想像を膨らませる。そして、練習・本番の二段階で、表現の仕方を身に付けさせる。これにより、お話づくりの授業が変わり、書く力が高まることを単元「お話の贈り物」の田中、木村の姿で示した。

### 【註】

- (1) ジャンニ・ロダリー 窪田富男訳「ファンタジーの文法」ちくま文庫 平成二年 三九〇四六頁
- (2) (1)と同書 四十頁
- (3) (1)と同書 四一―四六頁
- (4) 国語教育（教育大学講座第二三巻）東京教育大学教育学研究室編 金子書房 昭和二十五年九月  
但し引用は、『倉澤栄吉国語教育全集10話しことばによる人間形成』角川書店（平成元年二月 三二八頁）による。
- (5) (4)と同書 三二八―三二九頁
- (6) 経験したことを書く授業実践は、次の拙稿に詳しい。10項目からなる「書くときのポイント」は、これらの授業実践における子どもの事実から生まれた。  
①「細分化」と「読み合い」とで表現の仕方を獲得、活用させる  
新潟大学教育人間科学部附属新潟小学校研究紀要第五七集（理論編）平成十二年二月 七一―七四頁
- (7) 複数の短作文を読み合い多様な表現の仕方を使って書く子ども、新潟大学教育人間科学部附属新潟小学校研究紀要第五七集（実践編）平成十二年二月 四―十一頁
- (8) 「音声表現」と「話し合い」とで伝えたいことを効果的に書き表す力を高める 新潟大学教育人間科学部附属新潟小学校研究紀要第五八集 平成十三年二月 十四―二一頁
- (9) よりよい表現の仕方を使って伝えたいことを効果的に書き表す子ども 新潟大学教育人間科学部附属新潟小学校複式研究会紀要平成十三年九月 七六―八五頁
- (10) 伝えたいことを効果的に書き表す力を高める 新潟大学教育人間科学部附属新潟小学校研究紀要第五九集 平成十四年二月 十八―二五頁
- (11) 「細分化」と「音声表現」、評価するスキルで子どもはここまで書けるようになる 新潟大学教育人間科学部附属新潟小学校研究紀要第六十集 平成十五年二月 二一―二七頁
- (12) 新潟大学教育人間科学部（現在は教育学部）附属新潟小学校に勤務していたときの実践である。なお、本稿中の子どもの名前は、すべて仮名である。

（上越教育大学特任准教授）